

教育の仕組み変える

苦難と挑戦

県立大50年の歩み

⑥

県立大の太田博道学長(74)に大学間競争をどのように生き抜くのか、いまの大学に求められる教育とは、公立大として地域に貢献する取り組みなどについて聞いた。

—大学を取り巻く環境の変化をどうみるか。
開学した1967年当時、日本人の四年制大学への進学率は10%程度だった。大学はある意味、エリートが集まる場所だった。将来の目標を持ち、

何をすべきかというビジョンを明確に持つ若者が集まった。こうした時代は知識の伝達、注入を中心とした教育でうまく回った。
現在は進学率が50%を超えようになったが、少子化に伴って学生の確保が厳しい大学が出てきた。全国の大学がいかにか特色、強みを打ち出して優秀な学生を確保できるかという問題を抱えている。県立大も例外ではない。

太田博道学長インタビュー



国際人材の育成と地域貢献の必要性を強調する太田学長
＝佐世保市川下町、県立大(山口隆行撮影)

—県立大の強み、ほかにない特色は何か。
県が設置した大学なので、県の施策に貢献する必要がある。例えば長崎大より、もっと地域に密着していくことが大事になる。

—県立大の強み、ほかにない特色は何か。
県が設置した大学なので、県の施策に貢献する必要がある。例えば長崎大より、もっと地域に密着していくことが大事になる。

グローバル化が進む中、長崎に近いアジア各国との友好交流への貢献はますます要求される。国内、県内の人口が減る中、経済活動や地域の活力を維持するためには当然、アジアと協力しなければならぬ。こうした将来を見据えて人材を育てる立場の大学には、従来

中、長崎に近いアジア各国との友好交流への貢献はますます要求される。国内、県内の人口が減る中、経済活動や地域の活力を維持するためには当然、アジアと協力しなければならぬ。こうした将来を見据えて人材を育てる立場の大学には、従来

の「知識伝播型」の教育から、学生が主体的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」への転換が強く求められる。2016年4月の学部学科再編は、教育の仕組みを変えようという意味でもいいタイミングだった。

—佐世保校では24年度末までのキャンパス建て替えが計画されている。アクティブ・ラーニングができるよう、講義室は従来のスタイルからガラリと変え、学生が移動したり机を組み合わせたリ、わいわいディスカッションできるようにしたい。学生が簡単な商売をできるような「経営実践スペース」も用意したい。これからは社会人教育や生涯教育も意識し、より地域に開かれた大学にしていくことも重要だ。

(聞き手は中島宙) **〓おわり〓**